

『総合文化研究』第五号刊行にあたって

総合文化研究所所長 亀山郁夫

『総合文化研究』第五号をここにお届けする。

二〇〇一年初夏に遠山プランが出て以来、国立大学をめぐる環境はいよいよ厳しくなり、大学の統廃合、トップ三〇などをめぐる議論が全国的に沸騰している。世界レベルに伍する研究の国家的育成および高等教育の分業という基本メッセージが示唆しているのは、加速的に変容する現代社会にあつて、自らの境位を見定める作業を疎かにするなということでもある。「競争的」という耳慣れぬ言葉がまさにその現れだろう。しかし、大学における研究教育にいつのまにか抜き差しならぬ意味を持ちはじめたこの言葉が、たんに「早いもの勝ち」を意味するだけであつてはならない。時代の流れに掉さしつつ、徹底した孤立のなかに身をおく道も、アカデミズムの一つの本来的なあり方ではないだろうか。今後、COEとの関連などにおいて、本研究所が果たす役割はますます重要性を帯びてくると思われるが、本研究所としては、世界および地域社会とより強い結びつきを図りつつ、良識ある「孤立」をも一つの旗印として掲げていく心構えが大切だと思う。

『総合文化研究』五号は、きわめて時宜を得た特集を組むことができた。「九月一日」の「悲劇」を視野に収めながら、本学における南西アジア研究の現状を改めて見直そうという画期的な試みである。この態度は、「戦争特需」と皮肉られるジャーナリズムのあり方に対する一定の批評的立場を示すものでもあり、大きな評価を期待している。

今年一年、本研究所は、多種多様な行事で活気にあふれ、一般市民から世界的な研究者が往来する真にフォーラム的な空間を獲得することができた。それぞれ全七回ずつ行われた公開講演会「文化は都市を結ぶ」および二つの公開講座「世界の都市、その知られざる肖像」「アジアの表象文化」は、本研究所員の実力を広く一般に知らしめるよい機会になった。ゲストの先生、研究所員のご協力とご努力に対し、心から敬意を表したい。来年度もこれらの試みが幅広く継続されることを願うとともに、国際言語文化振興財団の日頃のご好誼にも心からお礼を申し述べる。

また、二〇〇一年末には本研究所主催の公開シンポジウム「現代世界と剥き出しの生」に、世界的な哲学者であるG・アガンベン教授をお招きすることができた。同氏の招聘にご尽力下さった先生方に感謝しつつ、このシンポジウムでの熱い議論を、喜ばしい「事件」として長く記憶に留めていきたい。